入選

半歌仙『人の果』の巻

埼玉県　あしたの会

白根　順子　捌

芭蕉翁

うきふしや竹の子となる人の果　白根　順子
　空蝉しかと縋る岩角　川岸　冨貴
廃校の母校を久に訪れて　宮本　艶子
　なかなか溶けぬ蜜のキャンデー　高橋たかえ
月光に遺跡の丘のぼんやりと　江森　京香
　草虱つけ還り来し猫　伊藤　稜志
香り立つ忘れ扇の物語　冨貴
　いじめられても好きを貫く　京香
魂の砕ける程に恋い焦がれ　たかえ
　トランプ占い宝籤買う　順子
パソコンに疲れたる目をマッサージ　稜志
　日本列島狙うロケット　京香
氷海の青き満月浴びる旅　艶子
　歌声の渦スキーヒュッテに　たかえ
神苑に漲る霊気森の奥　冨貴
　乗り合いバスを揺らす陽炎　順子
爛漫の花に窯場の残る町　艶子
　忍者の潜む池に亀鳴く

平成二十九年六月八日　満尾　熊谷市福祉センター

半歌仙『島々や』の巻

埼玉県　美々っと連句会

成田　淑美　捌

芭蕉翁

島々や千々に砕きて夏の海　成田　淑美
　若葉を渡る芳しき風　仲澤　輝子
ゴンドラに玻璃窓磨く人見えて　大堀　春野
　翼あるごと街を闊歩す　大石　壽美
月待ちつ螺鈿の卓に墨を摺り　中村ゆみ子
　城壁に這う山葡萄の実　輝子
猪を檻に追い込む勢子の声　淑美
　傷の手当てをしてくれた女　壽美
黒髪の乱れが語るささめごと　ゆみ子
　金婚式を祝う親族　ゆみ子
霊場へローカル線を乗り継いで　春野
　天に貼りつき凍る昼月　輝子
熱々の石狩鍋で呑み放題　淑美
　少年棋士は記録更新　輝子
消しゴムで消せればいいなシミと皺　春野
　まず離れから雪囲い解く　淑美
散り敷いてあの世へ還る花の屑　ゆみ子
　水面を揺らす春の旋律

平成二十九年六月二十八日　満尾　ジョナサン

半歌仙『雉子の声』の巻　宮城県　北杜連句塾

高橋玻斗子　捌

父母のしきりに恋ひし雉子の声　芭蕉翁
　都忘れを増やす庭先　蔦　とく子
清明に塑像一体仕上りて　佐々木嘉宇
　元素記号のおどる落書　川村　紀子
宇宙基地月は何処に宿るらむ　高橋玻斗子
　芋虫ばかり太るころほひ　嘉宇
うきうきと衣桁にかける秋袷　とく子
　結婚話急に無口に　玻斗子
賭けてみるあなたジゴロと知りつつも　紀子
　赤いマントで躱す猛牛　とく子
油槽船英仏海峡渡りゆく　嘉宇
　月も聞いてる百物語　紀子
雨乞に太鼓てんつく笛ひょうと　玻斗子
　国境のなき医師団の来る　嘉宇
十三年酒樽に酒熟寝して　とく子
　現世楽しや大仏の蔭　玻斗子
姉さまの手より生れる餅の花　紀子
　出初の梯空へ高高　嘉宇

平成二十九年六月四日　満尾　仙台市立文学館

半歌仙『飯食う男』の巻　滋賀県　あしべ俳諧塾

谷澤　節　捌

朝顔に我は飯食う男哉　芭蕉翁
　斑とんぼのとまる七半　谷澤　節
西東いざよふ月を追ひかけて　松本奈里子
　チアリーダーに残る幼さ　もりともこ
盆栽の幹の撓みに技極め　金城比呂子
　さえざえと練る朱(あけ)の印泥　節
しはぶきて鼻を突き出す胡人面　奈
　地図を見てるとガリバーになる　と
金縛りおこる噂の老舗宿　比
　闇に牙むき猫は豹変　節
大阪の派手なおばちゃん飴が好き　と
　茶々を気遣ふ関白の文　比
年の差の汗も涙もともに抱き　と
　愛染明王照らす夏月　節
古里の森は美はし酒うまし　比
　円卓囲む騎士の哄笑　奈
風に舞ふ繚乱の花チェス盤に　と
　ふらここ漕げば天地さかさま　奈

平成二十九年七月十日　満尾　奈良県文化会館

半歌仙『藤の花』の巻　愛媛県　石手寺連句会

松井　洋子　捌

草臥て宿かる比や藤の花　芭蕉翁
　孕馬をる小屋の闇（くらがり）　松井　洋子
やはらかに紙風船をつき合ひて　笹木　梢
　柱時計のネジゆるみがち　大月　西女
きらきらと月の煌めく露の中　山本あとり
　赤い羽根つけ父の襟元　天野　洋二
火祭に心のはやる新幹線　山崎　悦子
　プロポーズまですでに秒読み　井ノ口カ子
ご近所はW不倫に気がついて　あ
　役職一つ辞せば免罪　西
銃声の谺雪野を渡りゆき　洋
　墓標は小さき丸き石ころ　梢
着流して毘沙門坂の月涼し　悦
　トマトつぶしてパスタからめて　二
封筒にゴブリンを入れ呪文かけ　あ
　さはさは風の立ち初める辻　西
建前の木組に舞へる花吹雪　悦
　雲にまぎれて消ゆる双蝶　執筆

平成二十九年七月六日　満尾　天野庵

半歌仙『五月富士』の巻　茨城県　野田連句会

諸藤留美子　捌

目にかかる時やことさら五月富士　芭蕉翁
　正覚坊が遊ぶ砂浜　木之下みなみ
船長の舳先に遠く風読みて　松澤　龍一
　新大陸は指呼の間なり　白石　一有
満月の崖に私を羽搏かす　諸藤留美子
　蟷螂とまる高跳のバー　龍
村芝居下校のベルが急き立てる　み
　丸窓越しの長い溜息　留
遠距離の恋なおさらに身を焦がし　有
　神に仏に操誓わせ　み
遺言状象形文字で書いておく　龍
　公証役場神田駅前　有
白息がダイアモンドに透けている　留
　猫がじゃらして揺らす寒月　龍
来し方を手酌で語る無頼者　み
　残る氷は音符連ねて　留
ひねもすを五感楽しむ養花天　有
　絵凧を上げる国境の空　龍

平成二十九年七月三日　満尾　野田市市民会館

半歌仙『現の鷹ぞ』の巻　奈良県　あしべ俳諧塾

もりともこ　捌

夢よりも現の鷹ぞ頼母しき　芭蕉翁
　年の尽くるを繋ぐしがらみ　もりともこ
大河よりシタールの音渡り来て　谷澤　節
　どこで途切れる登校の列　松本奈里子
山の上の墨のやうなる空に月　金城比呂子
　隅へ隅へと冬瓜（とうが）ころがる　節
砥部の盃口あたりよし新酒よし　奈
　浅紅ルージュほのとゴールド　節
初恋はタカラジェンヌの男役　と
　疑心暗鬼で乗る玉の輿　比
広廂かなたに在すご本尊　奈
　茶柱立つと富くじを買ひ　節
中天の月を突き込む心太　節
　銀糸の滝は深き瀞へと　と
迷ひ猫毛並つややかリボン付け　比
　泣きべそ顔が笑ふ卒業　と
花花のささやき宙に満ちあふれ　奈
　あたり見回す種かかし立つ　比

平成二十九年七月十八日　満尾　橿原市すみれホール

半歌仙『わづかに』の巻　兵庫県　つばさ連句会

八尾暁吉女　捌

十六夜はわづかに闇の初かな　芭蕉翁
　なべての音をつつむ虫の音　八尾暁吉女
美術展誘ひ合はせて和やかに　城　依子
　同郷の友なまりなつかし　斎藤　桂
禿とはげ碁盤をはさむ集会所　岡部七兵衛
　高き香りを放つ蝋梅　依子
玉子酒きくか効かぬかまあひとつ　暁吉女
　足取軽く朝のジョギング　七兵衛
ライバルの今も住む町川向かふ　桂
　あぶなき橋と立看板が　暁吉女
ぽつかりと口をあけゐる恋の罠　依子
　浴衣の君と月光の下　桂
絵団扇の揺れに想ひの深まりて　七兵衛
　円空仏のおだやかに笑む　依子
三匹の犬がつぎつぎ大欠伸　暁吉女
　動き確かに春耕の人　桂
皆の夢のせて花びら舞ひ上がる　七兵衛
　イーゼル並ぶうららかな午後　依子

平成二十九年五月一日　満尾　インターネット

半歌仙『雉子の声』の巻　　神奈川県　夢々連句

永塚　尚代　捌
芭蕉翁

父母のしきりに戀し雉子の声　永塚　尚代
息吹きかけてたんぽぽの絮　北畠　明子
何段も雛人形の飾られて　後藤とみ子
自転車連ね濠を一周　柳田　宏子
今日の月大役終へて仰ぎ見る　三輪　慶子
渋柿剥いて縄によりこむ　明
猪が横断歩道のつそりと　尚
乙女心を狙ひ撃ちされ　と
板につく浜の番長の世話女房　明
原文で読む古典文学　と
稽古場は寺の本堂ジャズダンス　慶
棋界に育つ若き才能　宏
打ち水の石を渡りて茶事の客　明
蚊遣りをたいてまどかなる月　慶
予後の身を故郷の友の中におき　尚
ネットで探す地元酒蔵　宏
ここかしこ花あらはるる坂の町　
名残の霜の淡く解けゆく

平成二十九年四月二十四日　満尾　東京ウィメンズプラザ

半歌仙『十六夜』の巻　　東京都　筑波連句会

鵜飼佐知子　捌
芭蕉翁

十六夜はとりわけ闇のはじめ哉　安楽　明郎
村のはづれに現れし鹿　朝倉　和子
美術展入賞の報届くらん　三浦　康子
洗ひざらしのデニム似合ひて　鈴木　壽子
児のくぐる薔薇のアーチの先は海　鵜飼佐知子
氷あづきを融かす夕凪　壽子
連休の後は仕事をサボりたく　康子
附箋の隅に暗号を記す　和子
奴だけはよせよと釘を刺されても　明郎
裏の門外されたまま　小田　英珠
知らぬ間に無住の寺は売られゆき　東海林さくら
聖樹灯りてみんな賑やか　康子
霜柱ふみつつ辿る月の道　さくら
核なき世界泡沫の夢　壽子
ナパ・ヴァレーワインの香り身に浴びん　和子
こっそり直す紙雛の向き　明郎
ゆらゆらり水面に遊ぶ花の枝　佐知子
陽炎の土手きらり自転車

平成二十九年六月一日　満尾　ハイライフプラザいたばし

半歌仙『ほととぎす』の巻　長野県　飯田連句会

吉池　保男　捌

芭　蕉　翁

ほととぎす声横たふや水の上　吉池　保男
　四葩ほのかに浮かぶ夕暮　山口　光子
初めての主役抜擢知らされて　渡部多勢子
　心静かに抹茶一服　吉澤　健
月昇り高窓もるる影の濃く　片桐　晴夫
　忘れ団扇は文机の下　保
秋うらら友より届く初句集　光
　メールで送る熱き想ひを　多
今すぐに君の胸へと翼欲し　光
　どうかしたかと見上げてる猫　保
嗣治の油絵かかる応接間　健
　来客を待つ暖炉とろとろ　晴
風唸り寒月縋る樵の森　健
　秘蔵の銘酒山荘で開け　同
老いの波昔話が多くなり　光
　押され続けて泣いたぶらんこ　晴
笙の音の社の庭に花吹雪　多
　広やかな野辺凧躍る空

平成二十九年七月二十一日　満尾　飯田市東野公民館

半歌仙『雲のみね』の巻　神奈川県　伊勢原連句会

石川　桃瑪　捌

芭　蕉　翁

湖やあつさを惜しむ雲のみね　石川　桃瑪
　初ひぐらしは紙燭点く頃　池田　佳子
路地裏を桐下駄の音かろやかに　海老原　雅
　言葉みじかく交はすあいさつ　宇佐美湘山
おだやかな眠りを誘ふ望くだり　佳子
　運動会の準備万端　桃瑪
公園のシンボルツリー小鳥来て　湘山
　組閣人事の噂あれこれ　雅
進んでる婚活プラン秘密です　桃瑪
　逢引き写真見出しでかでか　佳子
あり金をはたき飛鳥の船の旅　雅
　希代の詐欺師やたら伊達者　湘山
三寒にむっつり顔の漱石さん　佳子
　凍月浴びて香箱の猫　桃瑪
棟札に匠の名ある大庄屋　湘山
　南無なむナムと祖父にならひて　雅
ふるさとの酒持ちよりて花の下　佳子
　丘もかげろふ畦もかげろふ

平成二十九年七月二十三日　満尾　伊勢原シティプラザ

半歌仙『早稲の香や』の巻　石川県　筑波連句会・サロン連句会

密田　妖子　捌

早稲の香や分け入る右は有磯海　芭蕉翁
落し水する人の遠影　高見よ志子
夕月夜子らは厨を手伝ひて　密田　妖子
尻尾を立てて猫の寄り来る　仝
郵便受け広告チラシばかりあり　よ志子
霰の叩く新しき傘　仝
公民館世話役集ひ粕湯酒　妖子
袖を引かれて後はずるずる　よ志子
もろともに漕ぎ出て行かん泥の舟　仝
騙し騙され弥陀の掌の中　妖子
何にでもファースト付けて粋なこと　仝
不気味な予感北のミサイル　よ志子
着ぶくれた夜回り通る月の道　仝
瀧の氷柱のよく育つ年　妖子
列島は超高齢の波かぶる　仝
進歩うれしいヨガの教室　よ志子
松添へて山一面の花盛り　瀬戸　瑞枝
清き流れに光る若鮎　よ志子

平成二十九年七月二十六日　満尾　密田宅

半歌仙『瓜の土』の巻　徳島県　徳島県連句協会

西條　裕子　捌

朝露によごれて涼し瓜の土　芭蕉翁
たくし上げたる夏衣の袖　西條　裕子
手遊びの古き篠笛響きゐて　三輪　和
爺から孫へ芸を伝へる　洛中　落胡
月明り提灯を消し峠越え　中山　和男
のつぺらぼうの案山子直立　落胡
活版にこだはる俳誌去来の忌　裕子
君と添ひたし何があらうと　和
東雲の乱れ髪をば梳り　和男
ロックンローラー猛り狂うて　裕子
靴底に金塊隠す密輸団　落胡
影寒々と己が心音　和男
ひとり旅友は寝酒と月光と　和
ツイッターにはつぶやきの満ち　裕子
言葉無き原始のヒトは印象派　落胡
蚕御殿を偲ぶ蔵跡　和男
花の門地図を頼りに尋ね行き　落胡
遥かな海の蜃楼の晴る　和

平成二十九年五月二十八日　満尾　渭東コミュニティセンター

半歌仙『紫陽草や』の巻　　徳島県　花音連句会

西條　裕子　捌

紫陽草や薮を小庭の別座鋪　　芭蕉翁
つかふ扇のやはらかき風　　西條　裕子
舞踏会ロングドレスの衣擦に　　曽根　燦
黒き車のそつと横付け　　関　真由子
界隈を知り尽くしたる月円く　　裕子
稲架一竿をかける山の田　　燦
運動会ママもカメラも走り出し　　真由子
幸せの場所今も恋ほしき　　裕子
エスコート濡るるあの娘のお下げ髪　　燦
路上ライブにファンの殺到　　真由子
漁舟揉まれて波間見え隠れ　　裕子
地蔵の肩に鳥の企み　　燦
月冴ゆる老婆黙して研ぐ菜切り　　真由子
死んでたまるか固き寒餅　　裕子
自鳴琴（オルゴール）ゆめとうつつのさかひめに　　燦
余寒の駅舎猫の居眠る　　真由子
鄙の昼どこも動かず花にほひ　　燦
滲む春嶺写す酔筆　　真由子

平成二十九年七月二十一日　満尾　文音